



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常～

春の風 —15歳— (中編)



松岡園子

昨日までと同じ電車に乗り、同じ道を歩く。

朝、9時前。十一時には最初の社員さんが来る。味噌汁やうどんの準備が間に合うだろうか。昨夜、寝る前に、頭の中で何杯も味噌汁を作った。大根、人参、油揚げ、わかめ、ねぎ——。明日は何が来るのかな。本社から届く味噌汁の具材は日替わりだから、その日にならないとわからない。だから全部考える。もし大根が来たら、いちよう切りにしよう。まず縦半分に切って、それをさらに半分でいいのかな？ いや、短冊の方が食べやすいかもしれない。だったらまず薄く切って……。もし油揚げが入っていたら……。油抜きをしないと……。あれこれ考えている間に、いつの間にか眠ってしまっていた。

目が覚めると枕元の時計は6時前を指していた。

「5分前かあ。目覚まし時計より早く起きた」

しばらくぼんやりとしていたが、急にエンジンがかかったように布団から飛び起きた。一階に下りて台所を覗くと母の夏子が、スクランブルエッグを作っていた。

「今日から1人やわあ」

返事があるかどうかはその日の調子による。今日はどうだろう。背中を向けていた夏子の表情が見え隠れすると、視線や目の形をまず見る。目の前のフライパンに向いている視線、丸い目の形。大丈夫そうだな。目の形が三角や一文字に見える時は、しんどそうにしていることがこれまで多かった。

「うーん、早く出るの？」

そう言いながら夏子がお皿のスクランブルエッグにケチャップで円を描いた。ゆりの肩からすっと力が抜けた。朝ごはんなど何もなかった時のことを思うと、毎日同じおかずでも食事を用意してもらえていることを嬉しく感じる。夏子にとっては、毎日することが同じだということが安心材料になるんだと、最近わかるようになってきた。

今朝のことを思い出しながら歩いているうちに、お菓子工場の食堂に着いた。10台のテ

ーブルが 2 列に分かれて並んでいる。それぞれのテーブルを囲む 80 ほどある椅子を見ると、膝のあたりがぞくっとした。まずお茶用のお湯を沸かして、お味噌汁の出汁をとって、うどんのつゆ用のお湯も沸かして……たかさんのことが頭の中を駆け巡る。東側の窓からは太陽の光が強く差し込んでいる。開いた窓の隙間からは、六甲アイランドへつながる赤い橋が見える。ゆりは今日が晴れで良かったと思った。外の景色が暗いと、自分の気持ちを奮い立たせることができるかどうか分からない。

「おはようさん」

振り向くと、このお菓子工場で清掃の仕事をしている影山さんの細い目がこちらを見つめていた。

「おはようございます」

「今日のお弁当はまだ来てへんな」

そう言いながら影山さんは、うどんの出汁を取る鍋に水を張り、火にかけた。影山さんの手は次から次へと動き、食材庫からかつお節や巾着袋を出していく。

「お茶のパックは……？　ここか」

「え……っと」

「だいたい毎日見ててな、わかっとうからなあ。味噌汁は 50 人分ぐらいやろ？」

「はい」

影山さんは、ゆりが食堂に着いてからしようと考えていたことを順番に片付けていく。影山さんの仕事は大丈夫なんだろうか。違う会社の人だし、違う仕事をしている人なのに、ゆりの仕事を手伝っていても良いのだろうか。影山さんの鍋を持ち上げる手は、厚い皮でおおわれているようにごつごつとして見える。

ゆりも冷蔵庫を開けた。昨日、余分に炊いておいたうどん用の油揚げを出そう。今日のうどんには、甘辛く味付けをした油揚げにとろろ昆布、かまぼことネギをのせよう。油揚げの入ったタッパーに手を伸ばそうとした時に、台車の音がエレベーターホールの方から聞こえてきた。

「お弁当が来た……かな」

ゆりは台車を押す配送の人を出迎えようと、食堂の入口まで向かった。台車が近づいてくるにつれて、1 番上の段に入っている薄茶色の油揚げと細ネギが見えてきた。

「あ、玉ねぎ……」

玉ねぎのことは昨夜の考えの中になかった。切り方を考える。細いくし切りにした玉ねぎが真っ先に思い浮かんだ。

「おはよう。今日から二宮のおばちゃんはおれへんのか？」

ゆりの顔を見るなり、配達員の中条さんが言った。

「今日からは 1 人です」

ゆりは軽くうなずきながら食堂を見渡した。中条さんの視線がゆりの額へと向いているのがわかった。今日はそんなに暑くないのに、額が汗ばんでいる。中条さんの顔がコンロの

前で動きを止めない影山さんの方へ向いた。

「おはようさん。お姉ちゃんだってやれるやんな」

影山さんの声が、エコーがかかったように食堂中に広がる。コンロに火をつけようとかがんでいる影山さんは、ゆりに話しかけているようだった。ゆりは、黙ってうなずきながら中条さんに会釈をした。中条さんは、清掃のユニフォームを着て調理をしようとしている影山さんを変だと思わないのだろうか。

「強力な味方がおってよかったな」

中条さんは弁当箱の入った番重を降ろし終わると、ゆりにだけ聞こえる声でそう言ってエレベーターホールの方へ向かっていった。

ゆりが中条さんを見送っている間に、影山さんは保温庫の中にご飯の入った弁当箱をつめようとしていた。

「あの……ありがとうございます」

ゆりがそう言うと、影山さんが一瞬だけ微笑んだように見えた。上向きの眉毛と細い目のせい、普段の影山さんは怒っているように見える。ショートカットで動きも素早く、どんな仕事でもこなしていきそうな勢いのある人だ。だけど、こんなに手伝ってもらってもよいのだろうか。影山さんだって自分の仕事をしないとイケないはずだ。何と切り出そうか。

「今日は玉ねぎやな」

影山さんはまた元の表情に戻り、1番上の番重に視線を移した。

「あ、切らないと」

「お湯は沸いとおからなあ、大丈夫そうやな。さ、はよ行き」

時計を見ると、9時半を過ぎたところだった。あと1時間ちょっと。ゆりは、1番上の番重を持ってコンロの前まで運んだ。コンロにかけられた鍋は、小学校の給食のおかずが入っていたものとそっくりで、ゆりは『給食鍋』と呼ぶことにしていた。給食鍋からは湯気が立ち、中ではかつお節入りの巾着袋が沸騰したお湯と一緒にゆらゆらと揺れている。ゆりはカバンからブルーのエプロンを取り出し、腰ひもを後ろで結んだ。

「くし切り、くし切り……」

玉ねぎの薄皮をむいていく。まな板の上で上下を切り落とすと、つんとした匂いが鼻の奥まで広がった。包丁で薄く切り始めると、目を開いていられないほどの痛みが両目にも広がる。鍋の中で揺れるかつお節入りの巾着袋を菜箸であげる。熱い雫が巾着袋からしたり落ちるのを、菜箸と蓋で押しはさんでさらに搾りとる。切った玉ねぎが給食鍋に入ると、下から沸きあがる泡にのってふわふわと浮いたり沈んだりしだした。

「その間にネギを刻んで。今日の具は玉ねぎとワカメやな」

玉ねぎを見つめているゆりに、影山さんが番重から出したネギを渡した。ゆりは、前に教わった通り、輪ゴムでネギの根っこの方、真ん中、先の方の3か所を留めた。軽く水浴びをしたネギは、まな板の上で大人しくまとまっているように見える。

ネギを切り、うどんのつゆを味付けし、油揚げの油抜きをして甘辛く炊く。味噌汁の味付

けをして、かまぼこの湯通しをする。どれもいいかげんにはできない。1つ終わったと思えば、また次にすることが追いかけてくる。時計の針を見るたびに思ったよりも進んでいて、額や首の後ろが熱くなってくる。

準備も全部終わったと思って時計に目を移すと、10時45分になっていた。もう準備だけで今日の仕事が終わったような気がする。でも、まだこれからだ。

「影山さーん、そろそろ休憩の時間やあ」

勝手口の方から、影山さんと同じユニフォームを着ている女性が2人、ゆっくりと入ってきた。そのうち、小柄な方の女性が食材庫からタッパーを取り出した。タッパーの中からは、ガラスか陶器のぶつかり合うような音がした。

「ありがとうなあ。全部やってくれたん？」

「いつもの所やろ、やっといたで」

「おおきにな。さ、お姉ちゃんも休憩しよ。11時から重労働やで」

テーブルを見ると、4人分のコーヒーが置かれていた。椅子に腰かけると、肩や背中にくっついていて大きな塊が背もたれに吸い込まれていくような気がした。

「じゃあお姉ちゃん、頑張りや。私らはもうひと仕事するさかい」

休憩が終わると影山さんと2人の女性は、勝手口から出ていった。11時になると、最初の社員さんが来た。ゆりはその動きを目で追う。社員さんは保温庫からご飯の入った弁当箱を取り出している。その横に積まれているおかずの入った弁当箱をトレイにのせて、ゆりの方へ近づいてきた。何か言わないと。

「こんにちは」

味噌汁の必要な社員さんだ。お椀はネギを入れて50セットぐらい用意してある。ゆりはお椀を1つ取り、味噌汁をすくって入れた。ネギがふわりと表面に浮く。ちゃんと味付けができていだろうか。何度も味見をした。でも、味見をしすぎて、最後の方は味がわからなくなり、味噌を足したり、だししょうゆを足したりした。もしかして、足しすぎたんじゃないだろうか。味噌汁は、煮つめると味が辛くなってしまうと祖母がよく言っていた。だから10回以上、味見ばかりした。

社員さんはテレビに1番近いテーブルにつくと、いつも通りという感じで食事をしだした。社員さんにとってはいつもと変わらないことでも、ゆりにとっては一大事だ。ひとくち目の後の表情が気になる。社員さんは味噌汁のお椀を手にして、ひとくちすすった。社員さんの表情はそれまでと変わらない。じゃあ、大丈夫ということかな。もし辛すぎたりしたら、顔が歪むだろうし。そんなことを考えている間に、次々と社員さんが訪れだした。そこからは、もう味付けのことを考えている間もないくらいに、味噌汁やうどんを渡すことに追われた。

1時前になると、社員さんの姿もまばらになってきた。

「もう終わりやな」

後ろからした声に振り向くと、使い終わった湯飲みを入れるバケツを抱えた影山さんが

立っていた。

「あの社員さんで終わりですか？」

ゆりは帽子をかぶった 50 代ぐらいの男性を見て言った。

「たいていそうやな。ほんまにお姉ちゃんの仕事、重労働やさかいな」

そう言いながら抱えていたバケツから湯飲みを出し、洗いだした。

「あ、いいですよ。やります」

「疲れたやろ。あんたはテーブルからやかんを片付けてきて」

影山さんは両手で湯飲みを洗いながら、あごで後ろのテーブルを指した。こんなに手伝ってもらっても良いのだろうか。でも影山さんがいなかったら、今日の仕事を終えることができただろうか。

湯飲み、給食鍋、やかん——使ったものを洗っていくごとに、身体にまとっていた重い塊も洗い流されていくような気がした。

「じゃあお姉ちゃん、今から学校やな」

影山さんは洗い終わった湯飲みを拭きながら言った。

「……学校のこと忘れてました。行ってきます」

ゆりは、はあとため息をついてから笑った。まだ今日の仕事が終わったわけじゃなかった。

「また明日なあ。お先に」

そう言って、影山さんは帰っていった。時計は 3 時過ぎになっていた。足首とふくらはぎに鈍い痛みを感じる。立ち仕事なのは、本社でのベルトコンベアーの仕事と同じだ。でも片付けひとつにしても、仕事を担うのが自分しかないということが違う。今、痛みを感じている足は自分だけの足ではなく、皆の足でもある。

「重労働やさかい……」

影山さんの声が聞こえてくるような気がした。

5 月に入り、定時制高校の生活にも慣れてきた。だけど、勉強は仕事とは違って、しなくても困るのは自分だけだ。いや、自分だって困らないかもしれない。それに、座って先生の話を聞いていると、身体の疲れと眠気が一気に押し寄せてくる。だから机に突っ伏して眠ってしまうこともある。先生は寝ているゆりに 1 度は声をかけるが、その後はそっとしておいてくれることが多い。

また昨日までと同じ電車に乗り、同じ道を歩く。朝、9 時前。食堂に着くと、すでに影山さんの姿があった。

「お姉ちゃんな、今は大変やけどな、今やった分は絶対にあとで役立つから」

影山さんは、洗った手を拭いたハンカチをポケットにしまいながら、食堂の椅子に腰かけた。ゆりも座った方が良さそうな気がして、椅子に腰を下ろした。

「今、こうやって働いている分、お給料がもらえるやろ。でも、稼いだお金は無くなることがある。取られることもある。けどお姉ちゃんが勉強して得た知識は、お姉ちゃんが生き

ている限り誰にも取られないし、自分を助けてくれる。お姉ちゃんだけのもんや。だから、しんどいと思うけどな、勉強をがんばり」

ゆりの目を見つめている影山さんの目が、少し赤くなっているような気がした。

誰にも取られない知識。そんなこと、考えたこともなかった。目に見えるものの方が価値があると思っていた。でも確かに目に見えないものは、取られたり無くなったりしない。ゆりはこれまでそういうことがあったかどうか考えてみたが、なかなか思い当たらない。自分を助けてくれるってどういうことだろう。目に見えないものは、そこにあるということを感じにくい。

1時過ぎ。今日も終わった。張りつめていた気持ちが緩んでいくのを感じる。ゆりがこっそり『最後の社員さん』と呼んでいる男性もそろそろと弁当箱のふたを閉めて、片付け始めた。

「ありがとう。ごちそうさん。これ、ちょっとだけやけど持って帰り」

給食鍋を流しに運び終わったゆりが振り返ると、調理台に1番近いテーブルにビニール袋が置かれていた。袋の横には最後の社員さんが立っている。ビニール袋の中には丸くて茶色いものがたくさん入っているように見えた。よく見ると、チョコレートが20個ほど入っている。

「もらってもいいんですか？」

最後の社員さんは、目を細くしてうなずいた。

「よく頑張っとおからなあ、ご褒美や」

最後の社員さんはそう言って、がははっと笑いながら食堂を後にした。誰もいなくなった食堂でゆりは袋に入ったチョコレートを見つめた。影山さんの言っていたことはこういう種類のことなのかな。目に見えない何かがチョコレートになったのかもしれない。それが何なのかが、まだわからないけれど。

袋の口を鼻に近づけると、濃く甘い香りがした。

(後編につづく)

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。